

## 入院時持参薬に基づく多剤併用状況の調査

国立病院機構函館病院 薬剤部 ○鈴木秀峰・大泉博文  
木村舞貴・阿部桂祐  
高津和哉・平吹真理子  
小原貴子・三上祥博  
向井博也  
同 消化器科 間部克裕

## 【要旨】

近年、問題のある多剤併用(ポリファーマシー)に医療者が積極的に介入し改善していくことが求められている。今回、入院患者の持参薬を用い多剤併用の状況について調査を行った。対象患者 119 名のうち 79 名に 6 剤以上の医薬品の併用がみられた。また、75 歳未満の患者群に比べ、75 歳以上の高齢の患者群の方が、多剤併用の割合、使用薬剤数平均値がともに高くなることが明らかとなり、入院時より使用薬剤数をもとに処方内容を総合的に評価した薬学的介入が必要であることが示唆された。

【キーワード】：多剤併用、ポリファーマシー(Polypharmacy)、高齢者、薬物療法ガイドライン

## 【はじめに】

不適切な服用による薬剤治療機会の喪失や特に高齢者における有害事象の発現の要因<sup>1)2)</sup>として多剤併用(ポリファーマシー)が社会的問題となっている。平成 27 年、日本老年医学会により高齢者の安全な薬物療法ガイドラインが全面改訂され、「特に慎重な投与を要する薬物のリスト」<sup>3)</sup>(以下、リスト)が提示された。また、領域別指針として「薬剤師の役割」が設定されている。さらに、平成 28 年度の診療報酬改定においては薬剤総合評価調整加算が新設された。

このように、問題のある多剤併用(ポリファーマシー)に医療者、特に薬剤師が積極的に介入し改善していくことが現在求められている。今後、当院においても薬剤師が問題のある多剤併用(ポリファーマシー)に積極的に介入するため、入院患者の処方薬剤の使用状況について調査を行った。

## 【対象と方法】

## 対象患者

2018 年 4 月 1 日から 4 月 14 日に国立病院機構函館病院(以下、当院)に入院し、薬剤部にて持参薬鑑別書を作成した 119 名(男性 64 名、女性 55 名、平均年齢 73.5 歳(範囲 26-98 歳))を対象とした。

## 調査項目と調査方法

お薬手帳の有無および入院時の使用薬剤、処方施設数について診療録及び持参薬鑑別書を用いレトロスペクティブ調査を行った。頓用薬を除いて 6 剤以上の使用をポリファーマシー(以下 PP)と定義した。また、75

歳以上の患者についてはリストの該当の有無について合わせて調査を行った。

なお、使用薬剤については医療用医薬品のみとし、OTC 医薬品、医薬部外品、サプリメントは除外した。

本調査は国立病院機構函館病院倫理委員会の承認を得ている。

## 【結果】

## ① 患者背景

調査を行った全 119 名において、PP の患者は 79 名(66.4%)であり、使用薬剤数中央値(範囲)は 8 剤(1-20 剤)であった。

## ② 処方施設数による使用薬剤数の比較

処方施設数の平均は 1.6 施設。41.4%の患者が複数施設からの処方を受けており、施設数が増えるのに従い使用薬剤平均値・PP 率とも増加する傾向にあった。処方施設数が 4 以上の患者の PP 率は 100%であった。(図 1)

## ③ お薬手帳使用による使用薬剤数の比較

お薬手帳の使用の有無で使用薬剤平均値(範囲)/PP 率を比較すると、有 8.6 剤(1-20 剤)/64.8%、無 6.4 剤(1-15 剤)/52.6%であり、お薬手帳の使用による使用薬剤数の減少、PP 率の改善はみられなかった。

なお、お薬手帳の持参率は 68.1%であり全国平均の使用率(97.1%)<sup>4)</sup>に比べ低かった。電子版お薬手帳の使用は確認できなかった。

## ④ 年齢による使用薬剤数の比較

75 歳未満の群とリスト対象である 75 歳以上の群と

を比較すると、使用剤数平均値(範囲)は 6.3 剤(1-16 剤)に対し 9.2 剤(1-20 剤)、PP 率は 52.8%に対し 77.3%と両者ともに高齢の群において高くなる傾向がみられた。

⑤ 75歳以上の患者におけるリスト該当薬剤使用についての検討

75歳以上の患者においてPP群と非PP群を比較するとリスト該当薬剤の使用率は46.6%に対し88.2%、該当薬剤平均値は0.7剤に対し2.3剤と両者とも多くなる傾向がみられた。使用剤数が10剤以上になるとリスト該当薬剤の使用率は100%となった。リスト該当薬剤としては、抗血栓薬(48.5%)、緩下薬(33.3%)、睡眠薬(28.8%)の順に多かった。(図2)

とくに睡眠剤においては5名の患者において、複数のベンゾジアゼピン系薬剤の併用がみられた。最大で4剤併用(商品名の異なるゾルピデム酒石酸塩錠の重複を含む)であった。緩下薬については期間中に酸化マグネシウム製剤による高Mg血症が疑われた症例の報告はなかった。

【考察】

75歳以上の高齢者においてPP率が77.3%と高く、使用薬剤数が増えると共にリスト該当薬剤の使用頻度も高くなっている。使用剤数と薬剤有害事象との関連性を調査した報告によると6剤以上で薬剤有害事象のリスクは有意に増加する<sup>2)</sup>。また、同時に薬効の重複や薬剤間相互作用など、薬剤による潜在的な有害事象のリスクも高くなると考えられる。今回の調査では使用剤数の増加により、リスト該当薬剤の使用患者の割合、該当薬剤数ともに増加する傾向がみられた。10剤以上の使用ではリスト該当薬剤の使用率は100%となった。Nishigakiらの調査においても使用剤数とリストに該当する患者割合との相関性が示されており<sup>3)</sup>、入院時より使用薬剤数をもとに処方内容を総合的に評価した薬学的介入が必要であることが示唆された。

リスト該当薬剤においては、抗血小板薬の使用が最も多かった。当院は循環器科において専門医による心血管インターベンション治療や心房細動に対するアブレーション治療がおこなわれており、循環器疾患を有する患者が多いことが寄与したのではないかと思われる。非専門の他診療科での多剤併用についてとくに介入が必要と考えている。睡眠剤においては約3割の患

者に使用が見られ、そのうち5例において、最大4剤の複数のベンゾジアゼピン系薬剤の併用がみられた。高齢者は肝代謝能力が低下しており、過鎮静、認知機能低下、せん妄、転倒・骨折のリスクが高まることから、医師等と連携し、不必要な同効薬剤の重複投与回避など、薬剤適正使用にむけた評価が必要であることが示唆された。

また、お薬手帳の使用による使用薬剤数の減少は見られず、お薬手帳の有効活用に関する検討も、今後必要であると考えている。

最後に、本調査においては抗血栓薬の使用による出血性病変の発現など、リスト該当薬剤の使用による有害事象発現率の評価はできていないため、今後の検討課題であると考えられる。

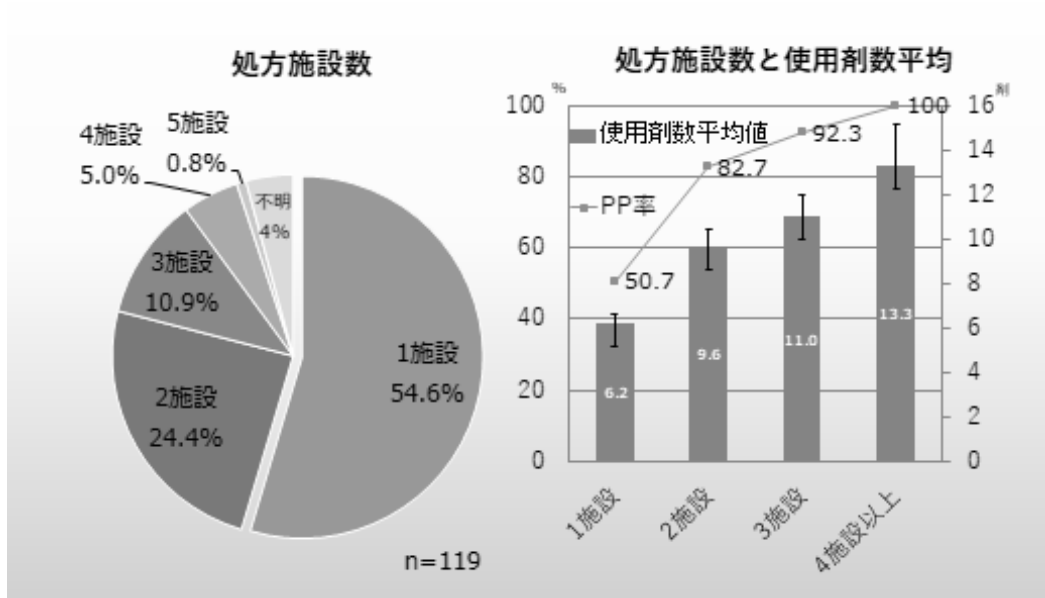
【結語】

今回の調査をもとに当院でも平成30年6月から薬剤総合評価調整加算の算定を開始した。患者への実際の介入により処方剤数の減少に関与できたが、症例は少なく今後の課題といえる。

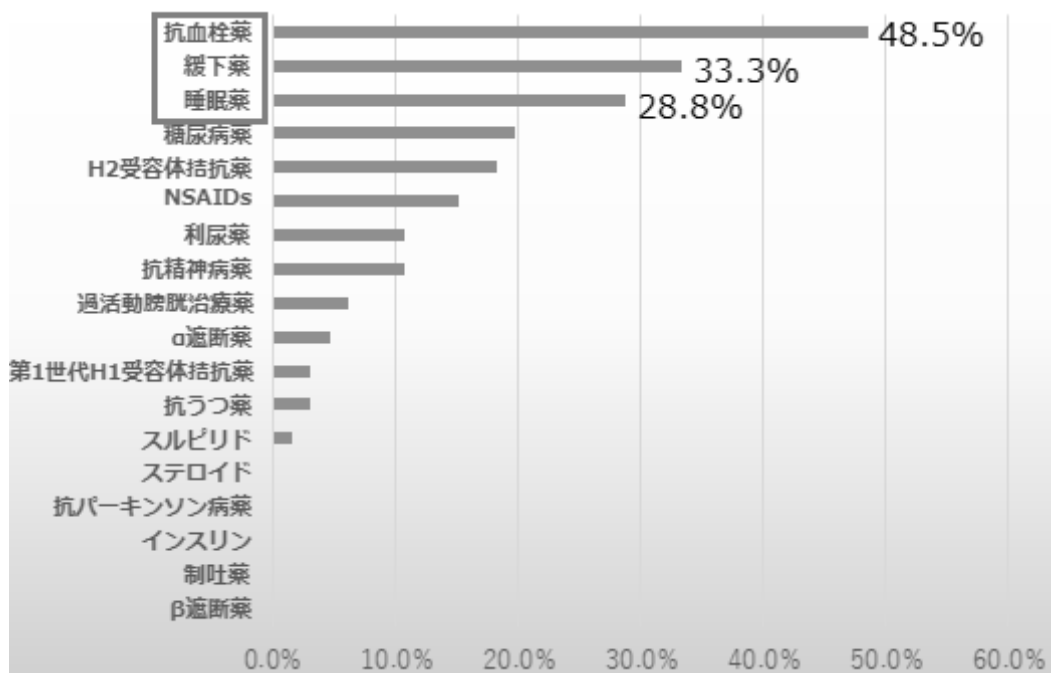
【文献】

- 1) 厚生労働省：平成30年度診療報酬改定の概要調剤
- 2) Kojima T, Akishita M, Kameyama Y, et al: High risk of adverse drug reactions in elderly patients taking six or more drugs: analysis of inpatient database. Geriatr Gerontol Int. 2012; 12: 761-2.
- 3) 日本老年医学会編：高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015，メジカルビュー社，東京，2015 pp26-31
- 4) 厚生労働省：かかりつけ薬剤師・薬局に関する調査報告書(平成30年3月)
- 5) Waka Nishigaki, Kazuya Ichikawa, Yuki Watanabe, Shogo Hotta, Koji Senzaki, Kiyofumi Yamada: A Survey of Drug Use in Elderly Patients Based on STPOP-J, Beers and STOPPv2, J Jpn Soc Hosp Pharm, 54, 180-184(2018)

本論文内容に関連する開示すべき利益相反事項はない



(図1) 処方施設数による使用薬剤数の比較



(図2) 75歳以上の患者に処方されていたリスト該当薬剤の割合